

〈追悼文〉嘆きの独言

船津，好明

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1995-02-24

嘆きの独言

船津好明

日頃敬服していた中本先生が、よもや帰らぬ人となるとは……。損失は測り知れません。ご厚宜をいただいていた私は、恩返しもできないまま、ただ色々な思いに耽けるのみです。誠に偉大に思いますが、私が先生のご功績を論評などすることは畏れ多いので、私なりの狭い視野で哀悼の気持を述べさせていただきます。

私が沖縄語の研究をまとめて、琉大の中松先生に監修をしていただいて「美しい沖縄の方言」を出版したのが1988年（昭和63年）の4月上旬のことでしたが、先生はいち早く評論の新聞記事を書いて下さいました。私から頼んだものではないので、新聞をみて初めて知ったのですが、その年の4月21日付の琉球新報に載っていて、大変に誉められました。さほど誉められる内容の本かどうか知りませんが、私は先生の記事をととても嬉しく思いました。

先生にお目に掛かることは度々あって、その度に話がはずみ、自然に沖縄のことや言語のことに収斂していきました。しかし、先生は言語の学者でこれを職業としているのに対し、私は単なる関心者でこれを職業とする者ではありませんから、当然に知識水準に差が出るわけですが、先生は私に合わせて下さって、それで私は先生から多くを学びとることができたと思うのです。私は平素、不明なことに出会うと、それを書き留めておくのを習慣にしているので、先生にお会いする時には大抵問題が溜っていましたから、話題が尽きることはありませんでした。しかしもう、こういう形で勉強させていただくこともできなくなりました。ご健在ならこんな話題でお会いできたらろうにと思いながら、先生の在りし日を偲んで、ただ独り言をいうだけです。

沖縄語と共通語とは、各品詞の機能がよく対応しているが、全く同じというわけではない。言葉が栄えた時代や進化の差によると思われるが、現代において、どこまでが同じで、違う点はどこか、これが私の関心の一つである。1例として助詞の「や（沖縄語）」と「は（共通語）」をとり上げてみる。例証のため、沖縄語の母語話者になすねてみた。

「暑くない」を沖縄語で何と言うかと。すると「暑^{あち}こー無^ぬーん」と返ってきた。次に「暑くはない」は、と聞くと、やはり「暑^{あち}こー無^ぬーん」であった。ここでの関心は、共通語が異なるのに、沖縄語が同じになっていることである。この母語話者は一般人であり、学者ではないから素直な日常語として答えているものである。実は私も同じ答えを予想していた。

一方沖縄語の「暑^{あち}こー無^ぬーん」を元にして、これを共通語で言うと、品詞ごとに置き換え

れば「暑くはない」となる。「暑くない」も答えになりうるものか、迷うところである。

一般論として、2種の言語の間で、1つの表現の対応性が高いというのは、A語のaという表現を元にして、B語に直すと迷わずに1つの表現bとなり、B語のbという表現を元にして、A語に直すと迷わずに1つの表現aとなる、こういう場合をさすものと思われる。先の例に結びつけると、共通語(A)の「暑くない」(a)を沖縄語(B)に訳すと「暑^{あち}こ^ぬーん」(b)となるが、逆に沖縄語(B)の「暑^{あち}こ^ぬーん」(b)を共通語に訳すとき、迷いが生じるから、この例では共通語と沖縄語の対応にすっきりしないものが残る。その原因は助詞の「は」と「や」にあるように思われる。

「暑くない」と「暑くはない」は違う。しかし、その違いは全面的な違いではなくて、部分的な違いというべきであろう。この2語の違いを大きくとるか小さくとるかは、この言葉の使用者と使用の場面によって異なり、一概にはいえない。違いを大きくとれば「は」を外すことは許し難いし、小さくとれば、「は」の有り無しはどうでもよいことになる。他の助詞などにもこれに類する状況があって、用いるに必須の場合と必ずしもそうでない場合があるが、特に助詞は他の品詞を補って全体の意味をはっきりさせるための言葉であるから、その有り無しに注意が向き易いのは、助詞の助詞たるゆえんであろう。そういうわけで、「暑くない」と「暑くはない」の取捨を考えると、話者がその意味の違いの小さい方、即ち同じ意味の部分により多くの意識をおくとき、「は」を削っても抵抗感を持たないことになると思われる。

次に沖縄語の母語話者に、もし誰かが「暑^{あち}く^ぬ無ーん」と言ったらどう思うか、とたずねたところ、「何か欠けているようで変だ。自分は言ったこともないし、聞いたこともない。しかし、意味は分かる。」とのことであった。共通語の「暑くない」を品詞ごとに沖縄語に置き換えると「暑^{あち}く^ぬ無ーん」となるわけだが、これは日常語としては通らないというのである。即ち日常語としては間違いということになる。

ここで興味が湧くのは、その母語話者が「しかし、意味は分かる」と言った点である。広く考えれば、「日常の言葉としては変な言い方だが意味は分かる。」という例は多い。それらの例の多くは、日常語以外での正当な使われ方、例えば詩歌等の文語、演劇、話芸など、使われる道が大抵あるものである。

沖縄語としての「暑^{あち}く^ぬ無ーん」という言い方は、どんな場面で使いうるものか、それとも、全く使いものにならないのか、これから注意を払っていきたい。

こういう疑問には中本先生なら直ちに明快にお応えいただけるのにと、師を失った今、溜息をつくばかりです。

(沖縄語研究家)